Doing media talk through a mixed code of Hawaiian and English : An analysis of language practices between MCs and a commentator in a TV program

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古川, 敏明 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6199

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ハワイ語と英語の混淆コードによるメディアトーク：テレビ番組 MC と解説者の言語実践分析

Doing media talk through a mixed code of Hawaiian and English: An analysis of language practices between MCs and a commentator in a TV program

古　川　敏　明

要旨

オーストロネシア語族ポリネシア諸語に属すハワイ語については、これまで文法構造に関する言語学的研究あるいは再活性化運動に関する言語社会学的研究が中心に行われてきた。一方で、自然発話に基づく語用論的研究が不足しており、ハワイ語にとって比較的新しい領域における言語実践に関する研究の必要性が高まっている。本稿は 2010 年にハワイ州のテレビ局が放送した伝統舞踊フラの競技会の録画をデータとし、番組のインターミッション中の相互行為を談話分析的アプローチを用いて分析する。相互行為中の会話は主に英語で行われ、ハワイ語への切り替え、さらに英語への切り替え直しが観察された。こうした言語実践は「ハワイ語を話す」行為の多層性を示すものである。

キーワード

ハワイ語、談話分析、自然発話、語用論、言語の切り替え

1. はじめに

ハワイ語についてはこれまで文法研究や言語政策的な研究が多く行われてきた一方で、自然発話に基づく語用論的研究が不足している（古川 2015）。ハワイ語は消滅に瀕した言語であるため、ハワイ語だけで行われる自然発話を収集

できる言語使用領域は限られているが、たとえばテレビのようなマスメディアの世界では、主に英語による発話の中でハワイ語への切り替えが行われることが珍しくない。多言語社会ハワイにおける言語実践の動態を明らかにする上で、マスメディアにおける言語実践はうってつけの観察対象であるとすらといえるだろう。本稿では、文化イベントを中継するテレビ番組の録画をデータとして、番組 MC と解説者の間の相互行為を分析する。特に、言語の切り替えと呼ばれる現象に着目し、文化イベントを取り上げる番組という文脈において、どのように言語の切り替えが行われ、それによって何が成し遂げられているのかを話し言葉の談話分析のアプローチを用いて検証する。

以下では 2 節で先行研究レビューを行い、分析の枠組みを示す。3 節ではデータの詳細について説明する。4 節では会話の抜粋を提示して、番組 MC と解説者の間のやりとりで用いられる言語の切り替えに焦点を当てて分析し、5 節では結論を述べる。まず次節で分析の枠組みとなる言語の切り替えとメディアトークについて説明する。

2. 先行研究

2.1 言語の切り替え

公共空間における英語とハワイ語の切り替えを分析する上で、本節では関連する先行研究を取り上げる。まず、Gumperz（1982）は言語の切り替えを発話出来事内における二つの言語の並置であると定義している。言語の切り替えは相互行為の社会言語学という分野で論じられており、状況の変化に応じた切り替えと比喩的な切り替えがあるとされている（Blom & Gumperz 1972）。状況の変化に応じた切り替え（situational codeswitching）というのは、会話に新たな参加者が加わったりした際に、言語 A から言語 B への切り替えが起こり、新たな参加者が会話の内容を理解できるようにするような場合を指す。一方、比喩的な切り替え（metaphorical codeswitching）は、新たな参加者の登場などのような状況の変化がないにもかかわらず、言語の切り替えが起こる現象を指す。たとえば、言語 A から言語 B に切り替えることで、ユーモアや皮肉を生み出すといった場合である。

これと関連し、言語の切り替えには、発話者が当該の発話を聞き手にどのように解釈すべきかを示す文脈化の手がかり（contextualization cues）とし

ての機能もある（Gumperz 1982）。会話における沈黙や声色の変化も文脈化の手がかりとしての機能を持つので、言語の切り替えは多言語話者が保有する一連の記号資源のひとつだといえる。このような相互行為の社会言語学による言語の切り替え研究の後には、エスノメソドロジーや会話分析から影響を受けた研究が登場し、多言語なコミュニケーションにおける連鎖構造とカテゴリー使用の結びつきが分析されている（Auer 1998；Gafaranga 1999；Li 1998）。

言語の切り替えに関し、Meeuwis & Blommaert（1998）は、a monolectal view という視点を提唱している。ベルギーにおけるザイール人の言語実践を分析した論考で、分析者にとっては言語 A から言語 B への切り替えと見える現象が、話者自身にとっては常に有標な話し方であるとは限らず、むしろ手持ちの言語資源内における無標な話し方であると論じられている。この多層的な切り替えという観点は、参与者のほとんどが英語とハワイ語（さらにはハワイ・クレオール英語）を操る多言語話者であり、主に英語で展開されるやりとりに借用語としてのハワイ語が登場するデータを分析する上で、適切な分析の枠組みであるといえる。また、Gafaranga（1999）は mode という概念を提唱し、Meeuwis & Blommaert（1998）と同様、分析者にとっては言語Aから言語Bへの切り替えと見える現象が、多言語話者自身にとっては mode という枠内での無標な切り替えであることを指摘している。

先行研究からわかることは、言語の切り替えには多言語話者自身にとって無標な切り替えと有標な切り替えがあるということであり、特に有標な切り替えは状況に応じて、あるいは文脈化の手がかりとして比喩的に実践されているということである。しかし、無標な切り替えが社会的な意味を全く持たないということはないだろう。本稿ではそれぞれの発話がどのような聞き手に向けて組み立てられているかにも着目したい。たとえば、Goffman（1979）は、発話出来事における参加の枠組み（participation framework）という概念を用い、発話出来事に参加することが容認されていない聞き手（non-ratified listener）と容認されている聞き手（ratified listener）がいるとし、後者に関して話しかけられている聞き手（addressed recipient）と話しかけられていない聞き手（unaddressed recepient）などに類別し、能動的な話し手と受動的な聞き手というコミュニケーションに関する二項対立的な図式を超えた多様な聞き手について論じている。

2.2 メディアトーク

言語の切り替えが起こる状況はさまざまであるが、日常的な会話場面とそうでない会話場面を区別する必要があるだろう。テレビやラジオのようないわば制度的な世界では、相互行為が日常的な場面とは異なる制約によって秩序立てられているからである。たとえば、ニュースインタビューにおけるキャスターとゲストは異なる役割を担っているし（Clayman & Heritage 2002）、ラジオ番組でもホストとゲストとの関係性は状況からの制約を受けている（古川 2014；Hutchby 2006；西阪 1997）。スポーツの実況中継についても同様で、マラソンの中継における実況アナウンサーと解説者のやりとり、そして視聴者との関係性が、参加の枠組みの視点から分析されている（三宅 2004）。実況アナウンサーと解説者の関係性は単一ではなく、状況によりさまざまな参加の枠組みがあり得るのであり、放送スタジオ内の目の前の相手に話しかけているばかりとは限らず、想定される視聴者に向けて話しかけているという場合もある。このようなメディアトーク（Hutchby 2006）に関する先行研究を参照することにより、フラ競技会のインターミッションにおける番組 MC と解説者のやりとりも制度的な場面における相互行為として分析することが適切であるといえる。

相互行為分析において、以上の点を検証するには、対象となる実践の共同体に関する民族誌的な知識が不可欠である。本稿ではテレビ番組における 3 人の多言語話者の言語実践をデータとし、ハワイ社会に関する民族誌を背景とする言語の切り替えの有標性に焦点を当てつつ、切り替えを含む発話がどのような聞き手に向けられて組み立てられているかを分析していく。次節ではデータの収集方法および分析の枠組みについて述べる。

3. 方法

データとするのは、テレビ（K5）で放送されたフラの競技会メリーモナーク・フラ・フェスティバルの録画である。この競技会は毎年、ハワイ州にあるハワイ島ヒロで 3 日間にわたって開催される伝統舞踊フラの競技会で、女性のソロ部門（1 日目）、古典フラのグループ部門（2 日目）、現代フラのグループ部門（3 日目）が行われる。2010 年に行われた第 47 回大会の放送を録画し、分析用のデータとして収集した。番組では競技会の出場者た

ちが順番に演技を行う様子が中継され、演技の前後には番組 MC が出場者の紹介などを行う。本稿で分析の対象とするのは、大会 1 日目に行われた女性のソロ部門中盤に設けられたインターミッション中の相互行為である。特に番組 MC2 名とコメンテーター 1 名が画面に映り、前半の演技を振り返る場面（約 2 分半）を分析する。

インターミッション中の会話を文字起こしし、詳細な相互行為分析のデータとした。トランスクリプトでは発話内のハワイ語（ただしハワイ語の人名は除外）を太字で表記し、それ以外は会話分析で一般的に用いられる記号を用いた（付録 1 参照）。また、ハワイ語が用いられている発話については 2 行で表記し、上段にハワイ語、下段に英語の翻訳を付した（付録 2 参照）。より複雑な発話については 3 行で表記し、上段にハワイ語、中段に英語の翻訳、下段に英語の意訳を付した。トランスクリプト全体は付録 3 として本稿の末尾に掲載する。次節ではこうしたトランスクリプトを提示し相互行為中の会話を分析していく。

4. 分析・考察

競技会 1 日目の女性ソロ部門は 2 部構成になっている。1 部では全出場者が順番に古典フラ（カヒコ）を踊り、インターミッションを挟んで、2 部では現代フラ（アウアナ）を踊る。本節で分析するのは、1 部終了直後に始まったインターミッション中の会話である。

インターミッションが始まってまもなくすると、画面左にコメンテーターのプアラニ・カナヘレ（Pualani Kanahele（PK））、中央に MC のエイミー・カリリ（Amy Kalili（AK））、右にもうひとりの MC キモ・カホアノ（Kimo Kahoano（KK））が映る。以下ではこの 3 名のやりとりを分析していく。番組上の役割として、カリリとカホアノは番組 MC であり、カナヘレはフラのエキスパートとして演技および文化的背景の解説を担っている。1 部では、演技の前後に MC が出場者の紹介を行い、演技終了後にはリプレイが流されるとともに、カナヘレが演技についてコメントをするというやりとりが繰り返し行われた。

抜粋 1 はインターミッションに入った直後で、大会 MC のカホアノ（KK）が今晩は大会 1 日目だと述べている。カホアノは前半のパフォーマンスにつ

いて詳しく解説をできる人物として、もうひとりの大会 MC カリリ（AK）とカナヘレ（PK）の２人の名前をファーストネームで挙げている（1-8 行目）。カホアノは、まず最初にカリリに言及し、続いて of course という語句を用いてから、カナヘレに言及している。インターミッションまでの前半部でソロのダンサーのパフォーマンスについて解説を行ってきたカナヘレが解説を行う能力を有することはいわずもがなという含意があり、ここではカホアノが専門家として名前を挙げた２人について、いわば専門家としての序列をつけていることがわかる。

名前が挙げられた２人のうち、まずカリリが話し始め、カホアノに対して同じくファーストネームで応答する（10 行目）。ちょうどそこで、それまで声だけ聞こえていた３人が画面上に映り（11 行目）、12 行目以降もフロアを獲得したカリリが発話を続ける。

抜粋１　無標な切り替え

```
1   KK  and it is our (.)
2       first night here officially, .h
3       for the competition (.)
4       of the Merrie Monarch Festival.
5       and this is great. but you know (0.3)
6       two people who can tell us
7       more about that (.) is Amy
8       and of course (.) Pualani.
9       (0.3)
10  AK  aloha mai Kimo.
        aloha dir
        'Aloha Kimo.'
11      ((KK, AK, PK appear on the screen))
12      mahalo nui ( )
        thank you big
        'Thank you very much.'
13      (a) wonderful first half,  .h
14      (   )(the) girls and their kumu
                                   teacher
15      worked very hard over the past months, .h
16      preparing for this evening
```

ここで注目したいのは、カリリによる発話である。カリリは３箇所（10、12、14 行目）で、それぞれ aloha mai、mahalo nui、kumu というハワイ語

の語や語句を用いている。ここでは英語で話していたカリリがハワイ語への言語の切り替えを行ったようにみえるが、果たしてそうなのだろうか。aloha mai は挨拶の表現であり、カホアノに対する応答として用いられている。mahalo nui は感謝の表現であり、自分のことをハワイ語の専門家として名前を挙げたことに対して応答していると考えられる。kumu は「（フラの）師匠」という意味の語彙である。

一見、英語からハワイ語への言語の切り替えともみえる発話だが、フラ競技会を中継するテレビ番組という文脈を考慮すると、基本的な挨拶・感謝表現である aloha mai と mahalo nui、フラの師匠を指す kumu の使用は、フラを扱う番組に携わる人々にとって無標な話し方であるといえる。実際、カリリはそれぞれの語・語句を用いた後も、それらを英語に翻訳していない。つまり、聞き手として振舞っているカホアノとカナヘレはもちろん、番組の視聴者にとっても、すべての語・語句が英語に翻訳せずとも理解可能であるというカリリの理解と期待が示されている。

それでは、フラの番組における有標な切り替えとはどのような発話なのだろうか。カリリが自らの発話を有標な切り替えとして扱っていることがわかる場面を以下の抜粋で示す。抜粋 2 は抜粋 1 に続く場面である。

抜粋 2　有標な切り替え

```
13  AK  (a) wonderful first half,  .h
14      (   )(the) girls and their kumu
                                   teacher
15      worked very hard over the past months, .h
16      preparing for this evening
17      especially for the māhele kahiko.
                        section ancient
18      or the kahiko section. ((look at PK))
               ancient
19  PK  uh huh
```

カリリは大会 1 日目の前半のパフォーマンスを賞賛し（13 行目）、ソロダンサーたちと彼女たちのフラの師匠が何カ月も訓練を積んできたことに言及している（14 - 16 行目）。続いて、カリリは especially for the māhele kahiko（17 行目）と述べ、この日のためにダンサーと師匠たちが訓練を積んできた競技会 1 日目である this evening（16 行目）という時間カテゴリーを古典フ

ラ部門（前半）と現代フラ部門（後半）に類別化し、ダンサーたちが訓練を積んできたのは特に古典フラ部門だと述べることで、古典フラの文化的価値や難易度を強調している。

そして、カリリは発話を継続し、or the kahiko section（18 行目）と述べるのである。ここで注目すべきは、カリリが 17 行目で使用したハワイ語の語句（the）māhele kahiko を、すぐ後の 18 行目で or the kahiko section と言い直している点である。どちらの発話にもハワイ語の語か語句が含まれるが、17 行目の発話はハワイ語として産出され、18 行目の発話は 17 行目と同じ指示的意味を持った発話を繰り返す役割を担う英語翻訳として産出されている。つまり、17 行目の発話（the）māhele kahiko は、英語からハワイ語への有標な切り替えである。抜粋 1 とは対照的に、同じ指示的意味の発話が英語で繰り返されているので、無標ではなく有標な切り替えであるとみなすことができる。

一方、カナヘレは、ある意味わざわざ英語翻訳を行ったカリリの言語実践が不適切であるという評価をすることもなく、最小の応答をしているだけである（19 行目）。この場面で聞き手となっているカナヘレとカホアノは、どちらも先住民文化に精通しており、ハワイ語から英語への翻訳を必要としていない。ではなぜカリリは有標な切り替えを行ったのだろうか。

理由として 2 点指摘できる。まず、17 行目の発話に含まれる māhele kahiko という語句の並びは、英語とは異なる被修飾語（māhele）と修飾語（kahiko）という順番になっている。kahiko は伝統的なフラを意味し、ハワイ語に習熟していないフラ実践者にとっても基本的な知識であるが、英語とは異なるハワイ語の文法構造が言語の切り替えの対象となっている。こうした文法にカナヘレとカホアノが精通していたとしても、番組の視聴者にとっては理解することが難しいと考えられるので、英語翻訳が用いられたというのが、もうひとつの理由である。言語の切り替えにはこうしたカリリの理解が示されていると考えられる。ハワイ語の文法が言語の切り替えを誘引するという点をもう少し検証するために次の抜粋を示したい。

抜粋 3 に先行する文脈としては、番組 MC のカホアノが出場者である若者たちのハワイ語能力が上がっているという評価を述べる。それに続いて、自分が知っている他の誰よりもカリリとカナヘレはハワイ語に詳しいと述べると、カリリとカナヘレが笑う。ここまでが先行する文脈で、続いてカ

リリがフロアを獲得する（44 行目）。カホアノの発話には、若者に対する評価と、カリリたちに対する評価が含まれていたが、44 行目でカリリが承認しているのは、前者に対する評価である。若者に対するカホアノの評価を承認した後、カリリは英語からハワイ語への切り替えを行い（45 行目）、その後、再び英語への切り替えを行っている（47 行目）。

抜粋 3　有標な切り替え

```
44  AK  pololei. that was
        correct
45      [ʻo] ia kekahi o koʻu mau manaʻo,
         TOP it one   of  my  PL  thought
        'That was one of my thoughts.'
46  PK  [ha]
47  AK  one of the [things that I notice ((shrugs))
48  PK             [((chuckles))
```

カリリはカホアノの若者に対する評価に同意（pololei）する。続いて、44 行目でカホアノの発話内容に言及している途中で（that was）、45 行では英語からハワイ語へ切り替えて発話を再構成し、若い世代のハワイ語能力の向上は自分も気がついている点であると述べている。この発話は抜粋 1 や 2 で示したような英語による発話の一部にハワイ語の語・語句が含まれる発話とは大きく異なり、45 行目はすべてハワイ語で産出されている。これに続いて、カリリは再びハワイ語から英語へと切り替え、ほぼ同じ指示的意味を述べている（47 行目）。

抜粋 3 で観察できるハワイ語と英語の間の切り替えからわかることは、45 行目のハワイ語の発話は、上記の文脈において無標な話し方ではないというカリリ自身の理解である。フラと関連するハワイ語語彙の単独使用は切り替えによる英語翻訳が必要でないのに対し、ハワイ語の構文として構成される発話は切り替えによる英語翻訳が行われなければ、（フラには関心があるかもしれないがハワイ語に精通しているとは限らない）一般の視聴者に理解されない恐れがある。カリリの発話はこうした理解に基づき、特定の受け手に向けて組み立てられている。

また、少し視点を変えれば、45 行目のハワイ語発話がなかったとしても、指示的な意味内容は過不足なく提示されている。カリリは 44 行目で that was と英語で話し始めており、カホアノによる若い世代に対する評価を受け

て組み立てられているこの発話は、そのまま 47 行目の one of the things that I notice と続けば、まとまりを持った談話として成立し得るからだ。英語だけで成立する談話の中に、指示的意味が重複するハワイ語の談話が挿入されているようにみえるが、あえて英語翻訳が必要なハワイ語での発話を行うことにより、何が達成されているのだろうか。

抜粋から観察できることは、カリリの発話が番組 MC のカホアノと解説者のカナヘレだけでなく、カメラの向こうに存在すると想定される番組視聴者にも向けられているという点である。基本的に英語で行われる発話におけるフラと関連するハワイ語語彙の単独使用は、英語とハワイ語の両方が発話の受け手にとって無標なひとつのコード（言語）であるという理解と期待が示されている。一方、英語翻訳を行うことで、翻訳の対象となったハワイ語の語句や構文に基づく発話が、フラの実践の共同体にとっての無標な話し方から逸脱した有標な話し方として扱われることになる。こうした無標な話し方と有標な話し方の切り替えを行い、あくまでも番組の視聴者を受け手として設定しておくことで、カリリは先住民文化、特にハワイ語のエキスパートとして自分自身を提示し、振る舞っているといえる。

次の有標な切り替えの事例もカリリによる発話から示したい。上述の抜粋から引き続き、若い世代のハワイ語能力が話題となっており、大会の出場者たちの能力が垣間見えるのはオリ（詠唱）を通してであるという考えをカリリが表明している（51 - 53 行目）。また、それは女性ダンサーたちが詠唱するハワイ語の詩の内容をしっかりと理解しているからだと述べてから（54、56 行目）、言語の切り替えを通してほぼ同じ指示的意味の発話を繰り返している（59 行目）。

抜粋 4　有標な切り替え

```
51  AK  with a real sense of confidence. and I think
52      a lot of that especially .h my mana'o
                                       thought
53      (  ) comes through in the oli
                                 chant
54      [for the girls feel very pa'a
                                 firm/solid/strong
55  PK? [hmmm
56  AK     [who] know what they are oliing about,
                                     chanting
```

```
57  PK     [((nods))]
58  KK  ((nods))
59  AK  what their chant is about,
```

これまで見てきたように、mana‘o（52 行目）、oli（53 行目）、そして pa‘a（54 行目）をそれぞれ含む発話は、ハワイ語語彙のみを含む無標な話し方である。一方、女性ダンサーたちの説明を続けるカリリは、詠唱を行っているダンサーたちは自分たちが何を詠唱しているかしっかり理解して自信を持っていると述べる際に、oliing（56 行目）という表現を用いている。これは先行する 53 行目で用いられていたハワイ語 oli（詠唱）と同じ語彙であるが、53 行目では名詞として用いられていたのに対し、56 行目では動詞（詠唱する）として用いられている。直後の 58 行目ではカホアノがうなづき、カリリの発話内容が理解可能であることを示している。しかし、カリリは what they are oliing about とほぼ同じ指示的意味を what their chant is about と英語で繰り返すのである（59 行目）。しかし、ただ繰り返しているのではなく、ハワイ語の動詞 oli の代わりに、英語 chant を動詞ではなく名詞として用いていることから、発話の構成が組み直されていることがわかる。ここで疑問なのは、ハワイ語 oli が 53 行目に登場した時にはハワイ語から英語への切り替えが行われなかったのに、56 行目に登場した時には切り替えが行われたのはなぜかという点である。換言すれば、同じ語彙 oli が用いられているにもかかわらず、前者は無標、後者は有標な切り替えとして扱われている。後者 what they are oliing about が有標とされたのは、フラの実践の共同体において、ハワイ語 oli は「詠唱」という意味（名詞）では用いられているが、「詠唱する」という意味（動詞）では用いることは一般的でないからだと考えられる。カリリによるパラフレーズを含む切り替えは、こうした理解を示すものである。

ハワイ語語彙 oli に関する観察を裏付けるデータとして、最後に抜粋 5 を示したい。カリリによる上述のコメントの後、カナヘレがフロアを獲得し、競技会におけるパフォーマンスの一部で行われるハワイ語の詠唱について解説を行う場面である。まず、カナヘレは詠唱の特徴について述べ（64 - 66 行目）、カホアノとカリリからの短い応答（67 - 68 行目）の後、すでにカリリが抜粋 4 で述べたのと同様に、ダンサーたちは詠唱しているハワイ語の詩を理解しているからより良いパフォーマンスにつながっていると述べている

(69 - 72 行目)。

抜粋 5　無標な切り替え

```
64  PK     [I] think the great thing about oli is that .h
                                           chant
65      it allows them to live
66      in- in a different ((looks at KK)) time.
67  KK  ((nods))
68  AK  pololei.=
        correct
69  PK  =a:nd because they know about
70      what they are chanting about, .h
71      the- the ((looks at AK)) voice comes out
72      [a little] bit better [than] it used to before.
```

ここで着目したいのは、カナヘレによる無標な話し方である。64 行目で、カナヘレが詠唱について述べる際、英語発話の中でハワイ語名詞 oli を用いているが、これは無標なハワイ語使用であり、直後に英語への切り替えを通した翻訳は行われていない。一方、若者のハワイ語能力について解説を続けるカナヘレによる 70 行目の発話 what they are chanting about を見ると、「詠唱する」という動詞として用いられているのは英語の動詞 chant である。この発話の後に、さらなるいい直しも行われていないので、やはり抜粋 4 におけるカリリの発話 what they are oliing about とは異なり、フラ実践者として無標な話し方をしていることが確認できる。

5. 結論

ここまでフラの競技会を中継したテレビ番組における番組 MC と解説者の相互行為を分析し、英語とハワイ語の間の言語の切り替えには、無標な切り替えと有標な切り替えが観察されると論じてきた。最後に、切り替えの方向性と多層性について述べておきたい。

切り替えの方向性については、すべての抜粋において、英語からハワイ語への切り替えが行われ、その後、必ず英語への切り替え直しが行われていることが観察された。とりわけ、必ず英語への切り替え直しが行われたという点が重要であり、これは英語話者に向けたフラ競技会のテレビ番組という枠組みが形成・維持されていたことを示している。

しかし、有標な切り替えでは英語への切り替えを通した翻訳が行われていた一方で、無標な切り替えでは英語への切り替え直しが行われても、先行するハワイ語語彙の英語翻訳が提示されることはなかった。つまり、インターミッション中の発話はフラ関連語彙に親しんでいる英語話者としての視聴者に向けられていたのである。そのような視聴者はフラ実践者や先住民文化に親しんでいる人々を包摂している。

有標・無標の切り替えという類別は、英語とハワイ語の間の言語の切り替えの多層性を明らかにする手助けとなった。本稿で主に分析したカリリの発話は目の前にいるカホアノとカナヘレを承認され且つ直接話しかけられる聞き手として行われていたが、同時に、承認されているが、直接話しかけられているわけではない潜在的な聞き手、つまり番組視聴者へも向けられていたのである。本稿で取り上げたデータの中では、無標な話し方は主にフラ関連語彙の単独使用（抜粋 1、5）、有標な話し方は語句やさらに長い談話とそれに後続する英語への切り替え（抜粋 2、3、4）であると論じてきたが、どちらも「ハワイ語を話す」という言語実践であるという点を強調しておきたい。特に抜粋 4 と 5 の比較を通して明らかになったのは、カリリとカナヘレの話し方が異なるという点である。番組中ではカホアノが 2 人とも先住民文化やハワイ語のエキスパートという扱いをしていたが、カナヘレはハワイ先住民文化、特にフラのエキスパートとして話している一方で、カリリはカナヘレのようにフラの専門家として無標な話し方をしながらも、時折、それとは異なる話し方を織り交ぜることで、ハワイ語のエキスパートしての振る舞いを見せていたのである。

本稿ではマスメディア、特にテレビ番組におけるハワイ語を含む自然発話をデータとする語用論的分析を試みた。多言語・多民族社会であるハワイ州のテレビやラジオにおける相互行為分析は未だ手付かずの題材が多いので、今後、こうしたメディアトークの領域へと研究の対象を広げていきたい。

付録１　抜粋で用いた記号一覧

.	下降イントネーション
,	継続イントネーション
?	疑問イントネーション
(1.0)	1 秒のポーズ
(0.2)	0.2 秒のポーズ
(.)	マイクロポーズ
.h	呼吸（吸気）
__	強調
:	長音
[ ]	発話の重なり
=	発話が途切れなく密着
-	発話の急な中断
( )	聞き取り不可
(x)	不明瞭な発音
(( ))	備考

付録２　抜粋中の翻訳で用いた文法用語一覧

dir	方向詞
TOP	話題
PL	複数

付録３　インターミッション中の会話の抜粋

1　KK　and it is our (.)
2　first night here officially, .h
3　for the competition (.)
4　of the Merrie Monarch Festival.
5　and this is great. but you know (0.3)
6　two people who can tell us
7　more about that (.) is Amy
8　and of course (.) Pualani.
9　(0.3)
10　AK　**aloha mai** Kimo.
aloha dir
'Aloha Kimo.'
11　((KK, AK, PK appear in the screen))
12　**mahalo nui** ( )
thank you big
'Thank you very much.'
13　(a) wonderful first half, .h
14　( )(the) girls and their **kumu**
teacher
15　worked very hard over the past months, .h
16　preparing for this evening
17　especially for the **māhele kahiko.**
section ancient
18　or the **kahiko** section. ((look at PK))
ancient
19　PK　uh huh
20　AK　**'Anakē** Pua your **mana'o**?
aunty　*thought*
21　PK　we have lovely selections for the (0.4)
22　for this particular section,
23　because we had a number of dancers (0.4)
24　from the monarchial period,
25　AK　uh huh
26　PK　uh:m and then we had a couple of dancers
27　of of deities, .h and very bombastic
28　dances of deities, and then we had love dances.
29　AK　((smiles and chuckles))
30　PK　very slow very subtle.
31　so (0.2) (they presented) all stages of life,
32　(0.5) and (all time). very well done.
33　KK　and you know I- I think o- one of the things

34 we have to value is uh the association of now (.)
35 PK ((looks at KK))
36 KK young people ((looks at PK)) (0.2)
37 [((nods))] writing (0.3) uh in- in the: the chants
38 PK [((nods))]
39 KK of our (0.3) ancient culture, uh but it shows
40 how strong **ʻōlelo** is. and
language
41 ((touches AK and leans forward)) <u>you</u> two ladies
42 know <u>more</u> about **ʻōlelo** (0.2) than anybody [I know].
language
43 AK&PK [((laughter))]
44 AK **pololei**. that was
correct
45 [**ʻo**] **ia kekahi o koʻu mau manaʻo,**
TOP it one of my PL thought
'That was one of my thoughts.'
46 PK [ha]
47 AK one of the [things that I notice ((shrugs))
48 PK [((chuckles))
49 AK obviously for (a thing) I'm very passionate about
50 .h is how many of the girls take this stage
51 with a real sense of confidence. and I think
52 a lot of that especially .h my **manaʻo**
thought
53 ( ) comes through in the **oli**
chant
54 [for the girls feel very **paʻa**
firm/solid/strong
55 PK? [hmmm
56 AK [who] know what they are **oli**ing about,
chanting
57 PK [((nods))]
58 KK ((nods))
59 AK what their chant is about,
60 I think it really comes through .h ((looks at KK))
61 KK uh huh
62 AK on camera I hope as well.
63 KK yea[:h]
64 PK [I] think the great thing about **oli** is that .h
chant
65 it allows them to live

```
66          in- in a different ((looks at KK)) time.
67  KK      ((nods))
68  AK      pololei.=
            correct
69  PK      =a:nd because they know about
70          what they are chanting about, .h
71          the- the ((looks at AK)) voice comes out
72          [a little] bit better [than] it used to before.
73  AK&KK   [((nods))]
74  AK                              [uh huh]
75  KK      (right.)
76  PK      so with the voices,
77          and with the mana'o:
                         thought
78  KK      ((nods))
79  PK      what they are chanting about,
80          everything is stronger. ((looks at KK and nods))
81  AK&KK   ((nods))
82  KK      ye:s (and) we have a strong
83          Me[rrie] Monarch Festival (.)
84  PK        [ha]
85  KK      now this is only the first half so (.)
86          that was kahiko, and now we look at
                     ancient
87          the modern hula. and how important-
88          important is the modern hula today, .h
89          and how special is it.
```

参照文献

Auer, P. (1998). Introduction: Bilingual conversation revisited. In P. Auer (Ed.), Code-switching in conversation: Language, interaction and identity (pp. 1-24). London: Routledge.

Blom, J. P., & Gumperz, J. J. (1972). Social meaning in linguistic structures: Code-switching in Norway. In J. J. Gumperz & D. Hymes (Eds.), Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication (pp. 407-434). New York: Holt, Rinehart & Winston.

Clayman, S. & Heritage, J. (2002). The news interview: Journalists and public figures on the air. Cambridge: Cambridge University Press.

古川敏明 . (2014).「ユカライリ」か「ウクレレ」か？：メディアトークにおける成員カテゴリー化 . 社会言語科学会第 33 回研究発表大会発表論文集 , pp. 56-59.

古川敏明 . (2015). メディア実践を通じた言語再活性化：ハワイ語ラジオ番組カ・レオ・ハワイはどのような番組だったのか . 人間生活文化研究 , 25, 16-24.

Gafaranga, J. (1999). Language choice as a significant aspect of talk organization: The orderliness of language alternation. Text 19 (2), 201-225.

Goffman, E. (1979). Footing. Semiotica, 25 (1/2), 1-29.

Gumperz, J. J. (1982). Discourse strategies. Cambridge: Cambridge University Press.

Hutchby, I. (2006). Media talk: conversation analysis and the study of broadcasting. Glasgow: Open University Press.

Li, W. (1998). The 'why' and 'how' questions in the analysis of conversational code-switching. In P. Auer (Ed.), Code-switching in conversation: Language, interaction and identity (pp. 156-176). London: Routledge.

Meeuwis, M. & Blommaert, J. (1998). A monolectal view of code-switching: Layered code-switching among Zairians in Belgium. In P. Auer (Ed.), Code-switching in conversation: Language, interaction and identity (pp. 76-100). London: Routledge.

三宅和子 . (2004). スポーツ実況放送のフレーム：放送に向けられた視聴者の不快感を手がかりに . メディアとことば 1 巻 (pp. 94-127). ひつじ書房 .

西阪仰 . (1997).「日本人である」ことをすること：異文化性の相互行為的達成 . 相互行為分析という視点 : 文化と心の社会学的記述 (pp. 73-103). 金子書房 .